昔々、空には10の太陽があります。地上は焼けつくように熱く、川は干上がり、農作物や木々が枯れて、人々は暮らせなくなってしまった。そのとき、弓の名手・后羿が弓に矢をかけ、9つの太陽をつぎつぎと射落としていった。最後に残った太陽は、それを恐れて「早朝にのぼり、夕方に沈む」という后羿の求めを聞き入れた。こうして、気候が正常になり、万物がすくすくと成長して、人々は平和に暮らせるようになった。その後、后羿は嫦娥を妻とし、仲むつまじい生活を送った。それに、西王母（西方の崑崙山に住むとされる中国伝説上の女神）から、いつまでも生きられるという不老不死の薬を一つ手に入れた。しかし、妻のことをすごく愛しているので、二人で一緒にこの薬を飲みたいと思うが、薬は一つしかない。そのため、この不老不死の薬を飲むことなく月日が流れていった。

ある日、不老不死の薬の存在を知った悪者が、后羿が家にいない時を見計らって男の家に押し入った。悪者は、家に一人で居た嫦娥さんに、不老不死の薬を渡さないと殺すと脅迫した。嫦娥は仕方がなく、自分で不老不死の薬を飲んだ。薬を飲んだ嫦娥は、ひょうひょうと天上に昇っていった。少しでも夫の近くにいたいと思い、人間に一番近い月の上で神になり、今でもずっと夫を思い続けて月の「広寒宮」で暮らすことにした。猟をしていた后羿が戻った時には、嫦娥がすでに月へ奔ったと聞き、悲嘆にくれて嫦娥を想った。后羿は毎年8月15日になると、庭にテーブルを置いて、彼女のことを想い、嫦娥が好きだった果物を供えた。それを見た周りの人々が、后羿のように供え物をならべて、嫦娥を記念するようになったことから、それが慣わしとなったといわれている。